

第5章 3. 幕府の衰退と庶民の台頭 b, 都市の発展と町衆 p144

①経済の全国流通網…[1 京都] [2 奈良]の大消費都市中心に編成される



遠隔地商業の活発化=畿内(小浜・敦賀)と津軽([3 十三湊])などをむすぶ日本海交易など
→港町([4 敦賀] [5 兵庫])や宿場町の繁栄
→[6 草戸千軒]遺跡(広島県福山市)

②城下町→戦国大名が領内経済と家臣団の統制を目指す(薬市楽座令の発布など)

③商品経済の発達、農村工業の発達→都市の発達

④寺内町…[7 一向]宗の寺院や道場を中心に商工業者ら集住
山科本願寺、石山本願寺([8 大阪])、尾山御坊([9 金沢])、吉崎、富田林など
[10 門前]町(宇治・山田(←[11 伊勢]神宮)、長野(←善光寺)、坂本など)

⑤自由都市の発達…[12 堺] [13 博多]、平野、桑名
[14 会合衆](堺)[15 年行司](博多)、年寄などよばれる豪商らの合議により運営

⑥京都=富裕な商工業者(=[16 町衆])の自立化すすむ
自治組織=[17 町]([18 両側町])を結成、町法をさだめ、[19 月行事]が運営

※両側町ひとつひとつが「自由都市」!!→その集合体が[20 町組]=[21 祇園祭]の基礎

町衆に[22 日蓮]宗広がる→1532[23 法華一揆]を結成し、町政を運営
→[24 一向一揆]と対抗(→山科本願寺焼き討ち)
→比叡山延暦寺と衝突、法華勢力は京都を追われる(→[25 天文法華の乱]1536)

c.東アジアとの交易

①[26 倭寇]=東アジア各地で横行した日本人を中心とする海賊集団
→朝鮮半島・中国大陸沿岸を襲撃・略奪

②日明貿易

ア) 明の建国(1368[27 朱元璋])→日本に[28 倭寇]禁止と、[29 入貢]を要求

イ) 1401 将軍[30 足利義満]、明との国交を回復(正使 僧祖阿、博多商人 肥富)
[31 朝貢貿易]の形式をとる。義満=「32 日本国王臣源道義」と自称

*朝貢=33 中国の属国として、使者が貢ぎ物をもっていき、引き替えに返礼をもらう形式

ウ) 1404 日明貿易を開始=[34 勘合]を持参(勘合貿易)

エ) 四代[35 義持]のときいったん中止→六代[36 義教]のとき再開

オ) 担い手…[37 堺]商人(細川氏と結ぶ)、[38 博多]商人(大内氏と結ぶ)
→両者、貿易の実権をめぐって激しく対立→1523 [39 寧波]の乱で衝突、大内氏独占
→大内氏の滅亡とともに断絶、かわって[40 倭寇]の活動再度活発化
ただし、日本人と結んだ中国密貿易商人が中心

南北朝の動乱のころ、[41 倭寇]とよばれる海賊集団が、朝鮮半島や中国大陸の沿岸をおそうようになっていった。
1368年、中国で[42 明]が建国されると、明は、海賊行為の中止と[43 朝貢]を日本に求めた。
[44 足利義満]はこれをうけ、1401年、明に使者を派遣して国交をひらいた。その形式は[45 朝貢]貿易の形をとり、[46 勘合]とよばれる証票を持参することを義務づけられた。
この貿易は4代将軍[47 義持]のもとでいったん中断したが、6代将軍[48 義教]の時に再開された。15世紀後半になると、貿易の実権は[49 堺]商人と結んだ細川氏や[50 博多]商人と結んだ大内氏の手に移った。両者は激しく争い、1523年には中国の[51 寧波]で衝突を引き起こした。そしてこの争いに勝った大内氏が貿易を独占したが、16世紀半ばに大内氏の滅亡とともに貿易も断絶、これとともにふたたび[52 倭寇]の活動が活発となった。

④朝鮮…倭寇を撃退した李成桂が[53 高麗]を滅ぼし[54 (李氏)朝鮮]をたてる(1392)
ア)朝鮮側の求めに応じ、[55 足利義満]のもと、[56 日朝貿易]開始
→1419 朝鮮側、倭寇の拠点と考えた[57 対馬]を朝鮮が攻撃([58 応永の外寇])

イ)守護大名・豪族・商人なども参加→[59 対馬]の宗氏をとおして統制をはかる
[60 通信符]を用いた貿易。朝鮮は3つの港([61 三浦])を開港・便宜を与える



ウ)1510年、三浦の商人らによる暴動([62 三浦]の乱)以後、衰退

朝鮮半島では、1392年、[63 倭寇]を撃退して名声をあげた武将の李成桂が高麗を倒し、[64 朝鮮]を建てた。この国も通交と倭寇の禁止とを日本に求め、足利義満もこれに応じた国交がひらかれ、[65 対馬]の宗氏を通して通交についての制度を定め、貿易を統制した。貿易は[66 応永の外寇]によって一時中断したが、16世紀まで活発におこなわれた。朝鮮は、日朝貿易のため[67 釜山]など3港(「三浦」)をひらいた。しかしここでの特権がしだいに縮小されると、不満とした日本人が[68 三浦]の乱をおこし、鎮圧された。

⑤琉球 1429年、[69 尚巴志]が3地方([70 三山])を統一(琉球王国成立)
→日本・中国・朝鮮・東南アジア諸国間の[71 中継貿易]で栄える。

⑥北海道([72 蝦夷地])南部への和人の進出=居住地を形成(道南十二館)
→先住民である狩猟民族[73 アイヌ]民族との交易→しだいにアイヌ民族を圧迫



1457年 大首長[74 コシャマイン]の蜂起→道南の[75 蠣崎]氏(松前氏)のみもちこたえる

沖縄では、北山・中山・南山の3地方勢力(三山)が争っていたが、1429年、中山王の[76 尚巴志]が三山を統一し、[77 琉球王国]をたてた。琉球は明や日本などと国交を結ぶとともに、東南アジア諸国間の[78 中継]貿易に活躍した。
一方、すでに14世紀には畿内と津軽の[79 十三湊]とを結ぶ日本海交易がさかんにおこなわれた。さらに、[80 蝦夷が島]とよばれた北海道の南部に進出し、各地の海岸に居住地をつくった。古くから北海道に住み、漁労・狩猟や交易を生業としていた[81 アイヌ]は、和人と交易をおこなった。和人の進出はしだいに彼らを圧迫し、たえかねた彼らは1457年、大首長[82 コシャマイン]を中心に蜂起、和人を追い詰めたが、[83 蠣崎]氏によって鎮圧された。